

(1) 課題名:心の先端研究のための連携拠点 (WISH) 構築

①計画概要

本計画は、心理学と脳科学や広義の認知科学の研究拠点を基盤とした「心の先端研究のためのネットワーク」を整備し、文理連携によって、心のはたらきとその神経基盤、進化基盤、及び社会基盤を解明することを目的とする。こうした心の先端研究拠点は、欧米にはあるが日本には無い。わが国は、年間の自殺者が3万人を超え、20歳台の死因の半数で1位を占める。背景には、対人関係の構築の困難、コミュニケーション能力の欠如、家族の崩壊等がある。本計画は、共感、信頼、公正、互惠、協力など、人間社会の基盤を構成する心のはたらきを学際的に解明し、科学的人間理解に基づく社会制度設計のための基盤を提供することを具体的な目標とする。人間の心の科学的解明には、認知科学や社会諸科学との連携、さらには脳科学との協働が必要不可欠である。新たな飛躍の機会として、神経経済学や神経政治学など、社会行動を含めた心のはたらきの神経基盤を解明する心の科学研究に対する要請が急速に高まっている。こうした背景のもとに、心・言語・絆、といった心のはたらきの科学的理解をすすめ、脳科学者と心理学者・認知科学者、そして社会科学者の協働を促進するためのインフラ整備が緊急に必要とされている。心の神経基盤、進化基盤、社会基盤、そして個体内での発達や心と文化の関連性の研究を含む、広い枠組みの中での共同・協働を促進し、日本が独自に発展させてきた霊長類研究など既存の成果を活かして、心の研究の世界最先端をめざすのが、本事業(Web for the Integrated Studies of the Human Mind, 略称WISH)の目的である。

②科学的な意義

人間の本性としての家族や言語の起源として、共感する能力や互惠的な行動など、社会的知性とその発達の科学的理解が急速に展開している。たとえば、ミラーニューロンの発見など脳科学の成果と、共感や模倣や他者の心の理解とを結びつけた研究が展開しつつある。人間は本質的に社会的存在である。その心のはたらきの神経基盤と進化基盤と社会基盤の解明は、文理の連携による新しい社会科学を作り出そうとしている。共感、信頼、公正、互惠、協力などを生み出す心の科学研究は、現代社会が直面する様々な心の問題についての理解を進め、そうした問題に対する解決策を個人レベルで提供するとともに、個人レベルでは解決できない社会レベルの問題に対する解決策の提供につながるだろう。心のはたらきを、脳科学や進化科学や社会科学と結びつけて理解し、神経基盤と進化基盤と社会基盤を解明する拠点は世界的にも存在しておらず、WISH事業は、日本独自の科学研究を開拓し、世界の最先端研究を生み出すことになる。

③所要経費

70億円(初期投資:16億円、運営費等:毎年度9億円で6年間の合計54億円)

④年次計画

平成23～28年度

平成23年度:「心の先端研究」の分科会活動を通じて形成し確立した文理8拠点の連携を発展させ、個々の特性を活かしつつ、未整備な装置(アイトラッカー、NIRS、TCS、fMRI、次世代シークエンサー等)についてその初期整備をおこなうと同時に、若手研究者を雇用し、すでに合意している客員交流制度を充実させた連携拠点型の研究体制を整える。それと並行して平成22年度から発足する文部科学省の「共同利用・共同研究拠点」等を活用した全国的展開への準備をする。平成24年度:拠点間交流プログラムの初期成果として、共感、信頼、公正、互惠、協力など、人間社会の基盤を構成する心のはたらきの研究成果を検証し、各拠点の交流協定を統合するかた



ちで海外派遣と招聘の事業を進め、世界標準の研究と国際連携ネットワークを作る。

平成25年度：「WISH(心の先端研究)」と冠した学術雑誌を刊行し、人間の心の科学研究の成果を国際的に発信し、J-STAGEを活用して国内外の研究成果のデータベース化を図る。

平成26年度：「心の先端研究」の比較的永続的な中核機関の立案に活動を収斂する。本計画の特徴であるウェブ型連携を維持しながらも、時限の経費に制約されない中核機関を構築する。こうした欧米にあって日本に無い心の科学研究の中核機関を、日本学術会議の支援を得て設立する。

平成27年度：「心の先端研究」を標榜する国立の中核機関を設立する。

平成28年度：これまでの6年間の研究を総括し新設の中核機関へと受け渡す。

⑤実施機関

京都大学心の科学ユニット（文・教育・総合人間学部・人間環境学研究科・情報学・こころの未来研究センター・霊長類研究所・野生動物研究センター・高次脳機能研究センター・高等教育研究支援センターから構成されるユニット、連携拠点の中核機関と位置づける）

慶応義塾大学人間知性研究所（慶応大と理化学研究所の共同構成）

北海道大学社会科学実験研究センター

東京大学進化認知科学研究センター

お茶の水女子大学生涯発達追跡研究センター

玉川大学脳科学研究所（米国カリフォルニア工科大学との国際連携）

理化学研究所・脳科学総合研究センター

自然科学研究機構・生理学研究所（機構内での領域融合センターを含む）

⑥学術コミュニティの合意状況等

本計画は、第20期の開始と同時に発足し、21期に引き継がれた日本学術会議心理学・教育学委員会「心の先端研究拠点と心理学専門教育（略称：心の先端研究）」分科会を中心に、毎年2回の定期会合と日本心理学会シンポジウム等で検討を重ねてきた計画である。この検討の成果は、すでに日本学術会議『日本の展望』のなかで心理学分野の分野別委員会の最終報告書素案（2009年、「人間社会の持続的発展にこたえる心の科学の構築」）としてまとめられている。この『日本の展望』でなされた提言を具体化するものが本計画である。また本計画の中核は、21COEからグローバルCOEへと継続採択される中で連携を進めてきた「心の研究」5拠点に、脳神経研究を進める3拠点を加えた8拠点であるが、これらの拠点メンバーは心理学ならびに隣接諸科学の学会長等の職をつとめるなど、それぞれのコミュニティと強く結びついている。

⑦国際協力・国際共同

米国は「脳の10年」に続いて、同様の国家的支援をめざして「心の10年」計画を始めた。英国は「心の豊かさ」プロジェクトを始めている。現代社会が直面する自殺、いじめ、ひきこもり、家族崩壊をはじめとした諸問題の解決には待ったがない^(注)。それには、人間の心そのものの研究と、神経基盤・進化基盤・社会基盤に関する先端研究が必須である。日本も、第4期の科学技術基本計画づくりを迎える中、科学技術・学術審議会の脳科学委員会は心と脳を基礎とする総合研究の重要性を自覚している。こうした研究には国際連携による切磋琢磨が必須だが、そのためにこそ日本らしい独自の貢献がなければならない。現在、すでに日本を中核として、人間の本性の進化的起源に関する日独米英伊仏の国際プロジェクトHOPE事業(京大)が立ち上げられている。同様に、WISH事業に参加する8拠点のそれぞれが諸外国との濃密な関係を取りむすびつつ、実験社会科学、生涯発達科学、社会脳科学、人間進化学、比較認知科学といった人間の心の科学的な研究の新領域を開拓している。こうしたすでに起動している事業を基盤として、①文理連携の心の先端研究の展開、②人間の日々の暮らしの問題から発する基礎研究、③大学・大学共同利用機関・独立行政法人など機関を超えた連携の研究拠点ネットワークの構築こそ、日本固有の貢献である。

注) 病気やケガ、そして自殺や事故、犯罪などがどれだけ社会にダメージを与えているかを測る指標としてDALY (disability-adjusted life year) がある。すべての傷病のなかで、トップはがん、2位は脳血管疾患だが、うつ病(3位)、認知症(4位)、自殺(6位)など心の病が上位を占め、その社会コストは極めて大きい。